

2014年7月6日

ブライアン・ブルエット牧師

ピリピ人への手紙：喜びの青写真 #3

今日もピリピ人への手紙の学びを続けていきます。パウロの書いた手紙の中でもこの手紙はもっとも喜びに満ちたものであることがこれまでの学びでわかりました。先週は、幸せと喜びの違いについても考えました。幸せは一時的なものであり、たいていの場合は状況に左右される表面的なものです。一方、喜びはもっと奥深いものです。喜びは、イエスとのつながりが根底にあります。皆さんにお伺いします。皆さんの喜びを奪うものは何でしょうか。心にある喜びが確かなものかどうかは、私たちの霊性に直結すると私は考えます。どれくらい信仰が強く成熟しているかということと、私たちの心につねに喜びがあるかということは、密接に関連しています。私たちの心をキリストに支配していただいて初めて、私たちは本当の喜びを得ます。パウロはピリピの信徒に宛てた手紙で、教会の人々と過ごしたひとときを懐かしく思い起こします。そして、ピリピの信徒のために、さらにはすべてのクリスチャンのために3つの祈りの課題を挙げます。愛が増し加わるように、人生における最善を見分ける識別力を得るように、そして、義の実が現れるように、でした。この手紙は、パウロがローマで軟禁生活を送っていたころに書かれたものです。この手紙の目的は、ピリピの教会の人々が持っていた疑問に答えるためであり、また献金とともにエパフロデトを送ってくれたことに感謝するためでした。質問に対するパウロの答えは、ピリピ2:25と4:18,19まで登場しません。ピリピの教会の人々が知りたかったのは、パウロの近況と、パウロが軟禁された今、福音は広まっているのかということでした。今日の聖書箇所は、ピリピ1:12-14です。

ピリピ1:12-14

1:12 さて、兄弟たち。私の身に起こったことが、かえって福音を前進させることになったのを知ってもらいたいと思います。1:13 私がキリストのゆえに投獄されている、ということは、親衛隊の全員と、そのほかのすべての人にも明らかになり、1:14 また兄弟たちの大多数は、私が投獄されたことにより、主にあって確信を与えられ、恐れることなく、ますます大胆に神のことばを語るようになりました。

では、12節を詳しく見ていきましょう。ここで、福音が広まっているかについてパウロが少し触れます。来週は、パウロが自身の近況について答える部分を学びます。

ピリピ1:12

1:12 さて、兄弟たち。私の身に起こったことが、かえって福音を前進させることになったのを知ってもらいたいと思います。

パウロには困難の中でも喜びがありました。「さて、・・・知ってもらいたいと思います」というのは、古代の手紙によく使われた言い回しで、その部分が重要であることを強調するために用います。昔の番屋が触書を貼り出すようなものです。町の人々は、そこに書かれたことをしっかり読むことが求められます。パウロは、兄弟たちと呼びかけます。これは、ピリピの教会の信徒たちと親しい交わりがあったことを示します。パウロは、自身の置かれた状況が表面的には不快なものである一方で、想像以上に好ましい結果をもたらしていることを承知していました。彼の福音の働きは停滞するどころか広まっていました。福音の前進こそ、パウロが情熱を注ぐことです。私たちはどうでしょうか。私たちは何に情熱を注ぐのでしょうか。どんなことに時間と労力を費やしていますか。私たちの誰も、パウロほどに燃えているとは思いませんが、ほんの少しでも、福音宣教に自分を投じているのでしょうか。13節を見てみましょう。

ピリピ 1:13

1:13 私がキリストのゆえに投獄されている、ということは、親衛隊の全員と、そのほかのすべての人にも明らかになり、

パウロは、自分自身がキリストのために投獄されていると自覚していました。何らかの犯罪を犯して投獄されたわけではありません。イエスに人生をささげたことで鎖に繋がれたのです。ですから、鎖は栄誉の勲章とも言えるでしょう。エペソ 6:20 では、パウロは鎖についてこのように語りました。

エペソ 6:20

私は鎖につながれて、福音のために大使の役を果たしています。鎖につながれていても、語るべきことを大胆に語れるように、祈ってください。

パウロは、鎖に繋がれた大使だと言います。鎖と訳された部分には、ギリシャ語でふたつの単語が使われています。ひとつめは、「デスモス」で、これは地下牢で囚人をつないでおく長い鎖です。もうひとつは「ハルシス」で、こちらは手首などにつける短い鎖です。つながれていたことで、よいこともありました。親衛隊の全員がパウロを知るようになったことです。彼らは時間交代制ですから、シフトが換わるごとにパウロが伝える福音を聞かざるを得ない人が与えられたということです。私たちが伝える福音を聞かざるを得ない人もいるでしょう。髪の毛を切ってくれる美容師、飛行機の横の席に座った人などはどうでしょう。パウロに比べれば、短い時間かもしれませんが、福音を伝える機会を用いることはできるはずです。看守は皆、パウロの人格を知ることができたでしょう。パウロが親切で忍耐強く、愛情や知恵のある人であり、福音を堅く信じていたこともわかったでしょう。世間の人たちは、私たちのうちにそのような品性を見ることができのでしょうか。ここで学ぶべきことは、看守につながれている必要はないということです。私たちににとっては、職場のデスクや教壇、営業相手が、つながれている対象かもしれません。難しい立場にいればいるほど、イエスとのつながりを周囲に示すことができると私は思います。人生や生き方が変えられたことを、給湯室や休憩室といった日常的な場面で示すことができます。自分の喜びを周囲に示したいと思えば、そのチャンスはたくさんあります。皆さんは連想ゲームをしたことがありますか。例えば、「暗い」と言えば、すぐ思い浮かぶ言葉は「夜」とか「黒」などでしょう。「青」と言えば、「空」と答えるかも知れません。さて、少し連想ゲームをしてみましょう。「笑顔」と言えば、何を連想しますか。「耳」と言えば、何を連想しますか。では、「クリスチャン」と言えば、何を連想しますか。正直に答えてください。これらの単語から「喜び」を連想した人はいるのでしょうか。

パウロは、牢獄の壁に囲まれていても福音宣教をどんどん前進させていました。このことは、ローマの町や教会にどのような影響があったのでしょうか。14節を見てみましょう。

ピリピ 1:14

1:14 また兄弟たちの大多数は、私が投獄されたことにより、主にあつて確信を与えられ、恐れることなく、ますます大胆に神のことばを語るようになりました。

パウロが投獄されたことで、ローマの教会内にも影響が広がっていました。14節から、ローマの教会は福音を告げ知らせる勇気が以前はなかったことが読み取れます。けれども、パウロのうちにあるものを見て、大胆になることができたのです。教会が大胆になれなかったのも理解できます。使徒 28:22 もパウロの投獄中に書かれた個所ですが、この個所から、牢獄の壁の外側ではどのようなことが起こっていたかを察することができます。

使徒 28:22

「私たちは、あなたが考えておられることを、直接あなたから聞くのがよいと思っています。この宗派については、至る所で非難があることを私たちは知っているからです。」

あらゆるところでクリスチャンに対する批判が起こっていました。ローマのクリスチャンは、「自分も投獄されたくなければ、黙っておいたほうがよい」と思ったのでしょうか。けれども、マタイ 5:14 は、私たちは光だと語ります。

マタイ 5:14

あなたがたは、世界の光です。山の上にある町は隠れる事ができません。

ローマの教会は、自分たちの光を柀の下に隠そうとしました。しかし、今日の聖書箇所 14 節には、パウロのおかげで他のクリスチャンも恐れず福音を分かち合ったと語ります。こうして、パウロはローマの教会に新たな確信を浸透させることができたのです。

結び

人生はこの世で受ける益にしたがって浮き沈みを繰り返します。私たちの喜びの源は何でしょう。人生で何に情熱を注ぐでしょう。何のために生きているのでしょうか。福音の前進を目指したパウロと情熱を同じくするなら、命も時間もエネルギーも財産も福音宣教に捧げるでしょう。そうすれば、そこに喜びを見出すでしょう。その喜びは、人生の浮き沈みに左右されたりしません。パウロの喜びは、福音の前進に直結していました。私たちも福音の前進に心をとどめるべきである、また、神の御国の一部である私たちには不断の喜びがあるべきだとパウロは語ります。神は使徒ペテロの信仰が福音を前進させるのに役立つことを見てとられ、ペテロに語ってくださいました。私たちにも同じように語ってくださったらどんなに素晴らしいでしょう。

マタイ 16:18

ではわたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。ハデスの門もそれには打ち勝てません。

神はペテロを岩と呼ばれました。ここでそっと教えておられるのは、ペテロが岩ではないということです。イエスという岩の上に堅く根差しているという意識を常に持つことが大切なのです。幸せと喜びの違いを知ろうとするなら、岩の上に堅く根差さなければなりません。そうすれば、状況や環境が変わったとしても、全体像に目を向けるなら、喜びは変わらないはずです。では、祈りましょう。